

庚鐘の如し、また下ること數百歩にして石橋あり、其長さ凡十二三間許なり、丘より岑に跨りて、其下を見おろせば、谷深くして雲を生じ、幾千仞とも計りしられず、礪の形は恰も虹に似て雲の梯とも思ふばかりのけはひなり、さてまた種々の石ありて、或は鶴龜、或は釜、或は舟、或は屏風など、其形の似たるに依て名つたる物舉てかぞふるにいとまあらず、いづれも自然の大石にして、天造奇構の妙なり、また岩窟も數所ありて、上世穴居の址ともおぼゆるばかりなり、さて奥の院と唱ふるは、嶧々たる三窟ありて、屹として高きこと三丈、嶙として近づくことあたはず、其形中はまろく、左なるはうろこのかたち、右なるはまどかなり、いづれも規矩を以て作るが如く、口おの／＼八九尺許づ、あり、其前に猿の形に似たる活石三ツ並べり、思ひなしにや、視ることながれ、聞くことながれ、言ふことながれの箴とも見ゆ、彼是レを思ひあはせて庚申山とは名つけたるなるべし、さて其右の方に登ること數百歩にして、東のつまと云所あり、眺望いふばかりなし、夫より下ること四町餘りにして大石あり、平石と唱ふ、長さ三十間許、高さ一丈餘り、建屏の如し、此石のきれめの間より、下ること八町許にして、はじめの胎内竇の東の方に出るなり、是この神境は、人寰を避ること遠く、ことに絶險の地なれば、昔よりしる人も稀なりしを、元祿年中より、や、登山するもの彼是ありといへども、容易に及ぶべき所にはあらざりしを、都賀郡三谷村の佐野一信といふ者、薬品を求める爲に、この山の岩窟を探り、夫よりこの佳境を開かんといさゝか道を造りて、人をみちびくこと、はなりぬ、そのゆゑを文政三年の夏の頃、上總人三橋臣彦と云者にはかりて、山中の荒壇を立てるし、庚申山記と云ものを書たり、ついでに云視ざる聽ざる言ざることは、傳教大師、天台の不見不聽不言を以て、三諦に表して、三猿の形を作り、三猿堂を建てるといへり、そは妄見妄聽妄言せざらんことを欲してなるべし、また猿ザルと不ザルと訓の通ひ、猿と申との字義通ふ、故に庚申の日を以て是を祀るなり。